

# とうきょうすくわくプログラム活動報告書

学校番号	1366718
学校名	日本聾話学校

## 1 活動テーマ

【テーマ】 4歳児・5歳児合同・・・砂場遊び「みんなの街を作ろう」

【テーマ設定理由】

本校幼稚部では、昼食後の昼休みに子どもたちは全員園庭に出て自然に触れたり、すべり台、ブランコ、ジャングルジムなどの遊具や砂場などで遊んだりする。縦割りの活動となり、特定の遊びを選ぶのではなく、その時に楽しみたいものを選び友だちや教師と一緒に遊んでいる。そこには、聴覚に障害を持った子どもたちであっても元気に声を出し、ことばをかわし、やりとりを楽しみながら遊ぶ姿が見られる。様々な場所でやり取りが展開され、子どもたちが想像を膨らませながら過ごせる時間ではあるが、その一つの場所である砂場をよりよく楽しめるよう環境を整えることで、子どもたちがやりとりを深める姿が見られるだろうと考え、本テーマを設定した。

## 2 活動スケジュール

令和6年5月上旬から3月上旬の昼休み(12:30～12:55) (原則毎日)

## 3 環境設定

- ・砂場
- ・砂場用遊具
- ・どんぐりや葉っぱなど

## 4 探究活動の実績

〈活動内容〉

・他の遊びも展開される中、砂場で遊びたいといった意思で遊べるようにする。子どもたちは途中で入れ替わったり、拾って別の遊びで用いていた葉っぱを砂場で使ったりして遊んでいた。

・砂場で遊びたい子どもたちが集い、道のように溝をスコップで作っていた。途中で溝をつなげているうちに車を通すのではなく、子どもたちは水を流して川を作りたくなった。子どもの思いを尊重し水を流して川を作る遊びに変わっていった。水を流すと砂は崩れやすくなり、また、水以外の部分が地面になる。地面の部分に橋をかけたり、葉っぱを船に見立てて浮かべて遊んだりする姿があった。崩れてしまうところに「手伝おうか」「ぼくもやるよ」という子どもたちが集まり、協力して遊ぶ子どもたちの姿があった。



水が流れていない部分を見つけると広く掘りすぎないようにスコップの形を選びながら溝を掘り水がつながるのを楽しみ合う様子が見られた。

- ・週をまたぐと水がひき、また砂場内の形状が変わっている。寒くなる時期でもあり子どもたちも水から離れるようでやや消極的な姿勢が見られるようになる。そこで、教師が砂場の中心に砂の山を作ってみた。すると、「トンネルをほりたい」「(わたしも)やるよ」ということばとともにトンネル作りを楽しむ姿が見られた。トンネルを掘り終わると「トンネルは暗いよ」とする友だちに対して「トンネルのライトピカピカ」とトンネル入り口にコップ型遊具をライトに見立てて置いたり想像を働かせて遊んだりする子どもたちがいた。

- ・水を流さずに溝を道として楽しむ様子もあり、街にいたることはなかったが、道が崩れやすい砂の習性から車を走らせ、子ども「ここで(道は)おしまい」子ども「うわー地震だー」教師「助けてあげて」子ども(砂に埋まってしまった車を助け出す)「ここは通れないよ、ここでおしまい」(立ち入り禁止に見立てて玩具を置く)などストーリーを展開させながら遊ぶ様子が見られた。



## 5 振り返り

- ・当初は砂場で道を作り、道を中心とした街づくりを展開させようと考えたが、子どもたちの水を流して遊びたいという思いを受け止め川に展開させた。子どもが主体的に遊ぶ様子が見られるようになったことは良かった。
- ・別の遊びも並行して行われていることから、遊ぶ子どもたちが少なくなる時間は子ども同士のやりとりが生まれにくくなり、個々で黙々と掘る、水を流すということもあった。
- ・溝の形ができてもうまく水が流れていかない時にどうしたらよいか、崩れやすくなる場所にどのように砂を加えていくとよいかということなど、うまくいかなかった場面が活動の中であった時に、教師から問いかけてみたもの子どもたちの中で考え合う機会にはなりきれなかった。試行錯誤する、協力し合うといった場面になると思われる。どのように教師が働きかけるのが良いのかは今後の課題としたい。
- ・道を作ったときに、個々で車を走らせることが中心となり、集団で「道のつながった街」として想像することが乏しくなってしまった。個人で遊びこむ良さからさらに大きい集団遊びへとつなげ発展させていくところへの環境設定の在り方を引き続き模索していきたい。